

ひとくちいかがですか

蓮谷 慧

◆まえがき

私は普段あまり本を読みません。自分の中で読書より優先順位が高いものが多いというのが大きな理由ですが、漫画と比べると、読むときに必要な精神力が大きいというのも一つです。漫画だと見れば多少の情報が入ってきますが、活字は読むという行為が必要なので、本に注意を向けるとだんだん疲れてきて途中で諦めることがしばしば。

そういう人のために、原稿用紙一枚分の超短いストーリーをいくつかまとめました。本当は数ページほどのものを書きたく、構想を練っていたのですが、プロットを書き終えた時点で燃え尽きました。残念。

それはそれとして、その超短編を合わせて七つ載せました。それぞれ別のベクトルのお話になっているはずなので、一つずつお楽しみいただけるかと思えます。良ければ、ひとくちいかがですか？

◆彼と動物

親しくしていた彼が、最近息を引き取った。僕は地元を離れていたが、その訃報を聞いて、唯一と言ってもいいほどの親友だからと有給を取って実家に帰った。故郷は心なしか緑が痩せ衰えて、黄土色や茶色がちらほら見えた。

彼には不思議な力があつた。彼の周りには動物がたくさん集まってくるのだ。猫やら犬やら雀やらが集まってくるのを、彼は一匹一匹に挨拶する。彼の温かさ引き寄せられているようだった。

通夜の後、僕は親族控室に顔を出した。彼の母は、僕を見るとすぐにこちらに近寄ってきた。長らく、彼女と会話を交わした。そのとき、彼女は僕にこう言った。

「あの子、動物好きだったでしょう。亡くなる前に私に言ったのよ。僕の棺の中に、動物のぬいぐるみを入れてほしい、僕が生きている動物の命を奪うのは忍びないから、って」

僕は、彼らしい死に方だ、と思った。

◆ 辞書

隣の席の磯貝君が唸っている。この前あつた講演会の感想文が書けていないので居残りしているのだ。不規則に漏れる唸りが妙に気に障る。ワークが進まないで、ちよつと静かにしてくれない？、と気持ち優先に言うのと、磯貝君は、はつとして謝つた。

そんなに感想文書くの悩むの、と聞くと、磯貝君は感想がないと言つた。感想なんて何々がすごいと思つただとか、良かっただとか、それと考察ぐらい書いておけば自然と埋まるものだと思つていたが、そもそも何も思わないのだとかいう。感情ぐらゐあるだろうと思ふけど。なんか探してみたら？と言ふと、磯貝君はまた同じように唸つた。それから静かだつた。

次の日、磯貝君は机の上に辞書を置いていた。感情類語辞典。行動が早いな。ページをめくりながら時折、これが、と声が聞こえてくる。学習機能が作用しだしたアンドロイドみたいなことを言うな。感想文は無事に終わつたらしい。この調子で感情を知覚していつてほしい。

◆ 死神

あれは中三の九月、金曜日の話だつたか、朝登校したら丁度後輩と出くわしたんですよ。その人とは小学校が同じでよく喋つてたんだけど、中学に入ってから全然会う機会がなかったんですよね。それはそれでいいとして、その人がその日に限つてか分からないけど、いやにちよつかいをかけてきたんです。何を話せばいいのか分からなくてそういう形になつちやつたのかな、とは思ふんですけど、まあ正直ちよつと鬱陶しかつたですね。

その次の日、その子が亡くなつたんですよ。ええ、突然に。部活の大会で移動してたら事故に遭つたみたいです。それでそのとき思つたんですよ。もしかしたらその人は自分が死ぬつていうことを知つていたのかもしれない。僕に何かを伝えたかつたのかもしれないと思うと、僕は何かできたんじゃないかな、と思うんですよね。未だに。

そのときから、死神はいるんじゃないかなと思ひ始めました。

◆明朝体

マグネシウムの力で洗濯物の汚れを落とす、と説明書には書いてある。「還元水でするので、繊維自体に付着したニオイや汚れの成分を元の状態に戻そう(還元)という自然のチカラを持っています」という説明書きが胡散臭さを引き立てる。

それに加えて、明朝体のフォントがより一層それを感じさせる。偏見ではあるが、効果があまりない商品の謳い文句はだいたい明朝体で書かれている気がする。きつと私みたいな印象論で語るような人がそれを買っているんだろうなと考えているが、私はそうではないと思いたい。これは効果があると思いたい。明朝体から疑似科学の匂いを感じ取っているのだろうか、そんなものあるはずはないので、きつとこの鼻は飾りなのだろう。

化学の知識が乏しいので、本当に効果があるのかと思って調べてみると、正しい使い方をすれば効果があるらしい。説明文やデザインを変えたら少なくとも私の信用度は上がるのになあ。

◆昇華する

高校生になったものの、未だにしょっちゅう涙が出てしまう。少しでも嬉しかったり悲しかったりすると、泣きたくなくても泣いてしまう。私は、この涙をなんとか有効活用できないかと、蓋つきの容器に涙を溜めておくことにした。水彩画を描くときにでも使えるだろうか。

ある程度溜まったあるとき、教室で新作のデザイン案を考えていると、近くを通りかかった男子が言った。「藤村さんって、こんなぐちゃぐちゃっぽいのも描くんやね」

そのときは、考えてる途中だから、と答えた。涙は出てこなかったのに、それを振り返ると、言い訳のよう聞こえて、自然と涙が出てきた。

今が使い時だ。赤色の絵の具を溜めた涙で溶かして、白いスケッチブックに描き殴った。途中、視界がにじんできたけれど、描き進めた。

描き終えたそれを改めて見ると、何を描いたのか分からなかった。ひどいなあ。また涙を溜めよう。

◆評論文

評論文の問題が解けない。ちゃんと読めば分かるはずなのに、分からない。もつと簡単な言葉で評論文を書いてほしいと思ったことはないだろうか。私はある。なぜ評論文が比較的難しい言葉で書かれているのだろうか。それは、評論文の意義に関連する。

そもそも評論文は、筆者が自分の意見を主張するための文章だ。そのために、筆者は言葉と論理を使う。この言葉というのが厄介なものだ。

言葉は、完全なものではない。筆者の思考と、それを伝えるための言葉には、微小な誤差が確実に存在する。その誤差をなくそうとすると、普段使わないような難解な単語を組み込まざるを得なくなるのだ。主張を大雑把に理解してほしいのであれば、簡単な言葉に置き換えて伝えることは不可能ではないが、その分だけ主張の本質との誤差は大きくなる。それがあまりにも大きいと、本来の主張とは別のことを主張しているともとられかねない。

正確な主張のために、難解な言葉の評論文がある。

◆吸い込む網

夏、公園の通りを歩いていると、公園の木の陰に巨大な影が見えた。僕は立ち止まってしまい、すぐにそれがこちらの方を向く。陰陽師の真つ白な紙人形に目と口を適当に書いたような風貌をしている。それは、虫取り網のようなものをもっている。

僕は直感でそれが危ないものだと感じた。走って逃げようにも思うように動かない。少しずつ後ろに下がると、その歩幅に合わせるように迫ってくる。よく見ると、近くにあった木やベンチがなくなっている。網に吸い込まれている？

やっこの思いで後ろを見ると、もう一体近づいてくる。なんとかして横に逃げると、それらはなぜかまだ直進する。訳が分からないが、二つが互いに近づくにつれて吸引力が強くなっていく。どうなるのかと見守っていると、二つはぶつかり合い、お互いの網に吸い込まれていった。残った網はくつついて、最終的には対消滅した。

何だったんだ、あれは。